

# POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」  
第41号 1998. 12. 10

発行  
北海道ポーランド文化協会  
〒060-0052  
札幌市中央区南2東2  
河合楽器製作所北海道支社  
電話 011-231-8661  
FAX 011-221-4936

やさしい

## ポーランド史(1)

伊東孝之



は、身分の低いもの、身分の高いものの作法を採り入れて成立している。たとえば、日本で「奥さん」という言葉を使うように使

ポーランドに旅した人なら誰でも気がつくことだが、挨拶するとき男性が女性の手にキスをする。何も知らずにやって来た日本女性が、突然自分の手にキスされてのぼせ上がってしまうということもあるらしい。ヨーロッパにも世界にもいろいろな国があるが、こんな風習がある国は珍しい。

私が考えるに、これは中世騎士道の名残である。日本とヨーロッパの歴史にはあまり共通点がないが、その珍しい共通点の一つに封建制がある。たとえば、お隣の朝鮮や中国にはほんとうの意味での封建制がなかった。ロシアにもなかった。しかし、日本とヨーロッパにはあったのである。

しかし、日本の封建制とヨーロッパの封建制はかなり違う。日本では封建制というと、権威への屈従と

か、女性の蔑視とかいうイメージがつきまとう。時代劇によく出てくる武士は殿様の前ではいつくばっている。ヨーロッパの騎士にはあのような姿勢は理解できないだろう。ヨーロッパでは騎士は独立不羈の存在であり、王に仕えるとしても契約に基づいて仕えるのである。社会的には対等なのである。最近亡くなった名監督、黒沢明の映画に出てくる武士は、この点でどちらかといえばヨーロッパ的といった方がよい。

さて、その騎士は女性崇拜の思想を発達させた。これも日本とは違う点である。もっとも、日本でも鎌倉時代までは女性の地位が高かったようであるが、もちろん女性崇拜といっても同じ身分の間だけのことである。身分の壁は封建制においては洋の東西を問わず高かった。

しかし、近代の作法というもの

が、これはもともと大名が相互の連れ合いを指すときに使った言葉であって、農民同士ではけっして使わなかった。ポーランドでも同様であって、たとえば、「パン」(男性のあなた)、「パニ」(女性のあなた)、あるいは「奥さん」というのは、もともと高位のもの同士で使った言葉である。

ポーランドはシラフタという封建貴族が発達したということがよく知られている。シラフタの語源は門閥を意味するドイツ語のゲシュレヒトで、チェコ語を経てポーランド語に入ったといわれる。主君への軍事的奉仕、騎士法に基づく土地所有、しかしとりわけ血筋がシラフタ身分への帰属を決定した。剣、領地、家柄、この三つはどこでも封建支配の基礎であった。

シラフタにはいろいろ特徴がある

が、二つだけ挙げると、まずシラフタの内部で階層分化が生じなかったことである。もちろん貧富の差はあったが、西ヨーロッパや日本におけるように格式の差がなかった。平等意識が強かったのである。もう一つはその数が異常に多かったことである。封建貴族はフランスではせいぜい人口の1%であったといわれるが、ポーランドでは10%にも達した。実はポーランドは近代を迎えたときに、農民とシラフタ以外に有力な社会層、とくに町人が存在しなかった。このため近代以降になっても価値観においてシラフタ、農民が町人化するというよりも、農民、町人がシラフタ化するという現象が見られた。

(早稲田大学教授)

その一つが、挨拶するたびに女性の手にキスをするという風習である。よい風習が残ったものだと思う。

## 第35回例会 講演と交流会

### 「ポーランドに於ける日本文学の現状について」

ーミコワイ・メラノビッチ教授をお迎えしてー

日時 1999年1月16日(土)  
講演 PM 3:00~4:30 (無料)  
交流会 PM 5:00~7:00 (3,000円)  
場所 すみれホテル  
(札幌市中央区北1条西2丁目 ☎261-5151)

#### プロフィール

1935年生まれ。ワルシャワ大学日本文学専攻課程で宮沢賢治の詩作品「春と修羅」という論文で学士学位取得。萩原朔太郎の作品研究で博士号取得。ポーランド科学アカデミー賞を受賞。ワルシャワ大学、ヤギェウオ大学の

日本文学の教授。

1964年-66年 日本政府留学生として早稲田大学で研究。小説、翻訳に安部公房「砂の女」谷崎潤一郎「瘋癲老人日記」川端康成「千羽鶴」など多数ある。

現在 宮城学院大学客員教授

同封の返信用はがきで出欠をお知らせください。

(12/25までをお願いします。)

# クラコフからカシユーブまで

—わたくしのポーランド熱—

栗原朋友子

時には無性に旅に出たくなること  
があります。それも狭い日本国内で  
はなく、海外の未知の世界に出て、  
異質な文化にふれてみたくなる。新  
しい発見に胸おどらせ、それを心の  
ひだの奥にたたみ込んで、与えられ  
た人生をより豊かにする意味で私は  
旅に出たいおもいかられていたの  
でした。

ちょうどそんな折りもあり、五年  
に一回開催される国際スラブスト会  
議（第12回）に主人が参加する機  
を利して私も同行することになりま  
した。この国際スラブスト会議はクラ  
クフのヤギェウオ大学を会場として  
開催されたので、今回はクラコフに  
一週間以上滞在しました。

日本の旅行社はポーランドの情報  
に通じていないと言っても過言では

ないと思われることがありました。  
日本からはグループ旅行団を組んで  
学会に参加する十一名が成田を出発  
しました。

八月末、クラコフに真夜中につい  
た私達の一行はホテルに着くまで宿  
泊地がユダヤ人地区であるとは誰も  
気づきませんでした。旅行社が予約  
した三階建ての新しい小さいホテル  
にチェックインしたとたん、普通は  
ユダヤ人以外は泊まらない宿の客と  
なった日本人一行は誰しも異様な思  
いにとらわれました。

私達のユダヤ人特別居住地区のカ  
ジメシユでの生活はこうして始ま  
りました。私は映画「コルチャック  
先生」、「シンドラーのリスト」を  
おもいだしました。「コルチャック  
先生」の映画では、医師のコル

チャック先生がユダヤ人の印「ダビ  
デの星」の旗を高くかかげて子ども  
たちの先頭に立ち、子供たちの恐怖  
心をやわらげ、人間としての尊厳を  
守ってやることに心を砕きつつ、子  
供たちと一緒に死出の遠足に出かけ  
るといふストーリーでしたが、いつ  
までもその映像を忘れることはでき  
ません。「シンドラーのリスト」で  
も、ユダヤ人を迫害するナチスとい  
う強大な組織にうわべは従順をよそ  
おいながらも敢然と挑戦し、個人の  
力で千二百人を超えるユダヤ人を死  
の運命から救出したドイツ人実業家  
の物語でした。

これらの映画のことと共に、アウ  
シュヴィツ強制収容所を北海道ポー  
ランド文化協会主催一九九七年の  
ポーランド旅行の折りに見学したこ  
となどが頭によみがえりました。映  
画「シンドラーのリスト」は、この  
カジメシユ地区でロケーションが  
行われたことを知り、映画の場面を  
頭に浮かべながら、シナゴグを見学  
し、廃屋と化した建物が立ち並ぶユ  
ダヤ人の住居跡などをみて、第二次  
世界大戦がポーランドにもたらした  
民族浄化の爪跡を肌で感じました。  
十日近いクラコフでの生活が終わ  
り一行はグダンスクに旅をしまし  
た。ここでもまた新しい発見があり

ました。

これまで何回も訪れたポーランド  
の中でも私にとって未知の地方で  
あったカシユーブ地方に行くことが  
できました。今回訪れたのはカ  
シユーブの中心の一つ、カルトゥー  
ズイの周辺でしたが、風光明媚なこ  
の地方の景観は神話化されて伝えら  
れていますので、ここに紹介いたし  
ましょう。

主なる神様が天地をお創りになっ  
たとき、神様はご自分のお創りになっ  
たものをすべて見渡されて「すべて良  
し」と言われました。その言葉にすべ  
ての天使は歓喜の声をあげ、神様のみ業  
をほめたたえました。

ところが、ひとりの天使だけが悲し  
げな面持ちで光り輝く天の大広間の片  
隅にすわっておりまして。それは「憐  
れみの天使」でした。

「なにか心配なことでもあるのか？  
ね どうしてそんな悲しそうな顔をして  
いるのか？ねわたしが自分の言葉によ  
って創造したこの世界が美しくない、と  
でも思うのか？」と主なる神様はその  
天使におたずねになりました。

天使は「おたずねと答えました。  
「いえ、すべては良いのですが、あの  
荒涼としたカシユーブの不毛の砂原と  
無数の岩石を見ていると、わたくしは  
どうしても喜べないのでございます。」

そして「憐れみの天使」は創造主の前



NUTY KASZUBSKIE  
KASZĘBSKI NUTE



To je króci, to je dluzi  
To kaszëbsko stolëca  
To są basë, to są skrzëpëci  
To oznëczô Kaszëba

To są hõci, to są ptõci  
To są prusci póltrójõci  
To je kleka, to je wól  
To je cale, a to pól

To je rydel, to je tycz  
To są chojnë, widlë gnojne  
To je prostë, to je krzëwë  
To je tylni kolo woznë

To je mali, to je wiõldzi  
To są instrumenta wszõlci

カシューブ地方の言葉を図で示した譜面

にひざまずいて言いました。「主なる神様！豊かな実りをもたらす地を少しばかり余分にお持ちではないでしょうか？」

そこで神様はもう一度世界を見渡されて、一点を指し示されました。そこは肥沃な土地で、水の澄んだ川と湖、陰をなす樹々、花咲く灌木、優美な山並み、かわいらしい谷がありました。

「さあ、これをあげよう。君の心に適うようにするがよい」と神様は仰せになりました。

そこで「憐れみの天使」は特別に与えられた土地の一部を取って、カシューブの真ん中に投げて、そこを「マリアの天国」と名づけました。

こんにちその地方は「カシューブのスイス」と呼ばれ、カシューブ随一

の山柴水明の景勝地として人々に親しまれています。

(『アレクサンデル・トライヒェルのカシューブ地方の伝説集』より)

このようにポーランドのなかでもポーランド語とは方言以上に異なる西スラブ語の一つである「カシューブ語」を今でも用い、バルト海沿岸スラブ人の風習を保っている地方に行くことができ収穫の多い旅でした。

ポーランドでのさまざまなかところを思い出すとき、体の芯にこころよい微熱が残っているような感じがします。これは私のポーランド熱とも言うべきものでしょう。

[随想]

## 桜 咲 く 国

富山 信夫

35年前の春、ポーランドではまだ日本人が珍しかった頃のことである。仕事でA・ヤナシュ育種研究所を訪ねていたとき、遙か極東の日本から研究者が来たことと報道記者が取材に来た…かわいなお嬢さんと一緒に、「娘のハンナです。中学生で、日本人をまだ見たことがないと言うので連れて来ました」と。

帰国して間もなく、その時の記事が載った雑誌がポーランド大使館から送られてきた。何と書いてあるのだろう？…Pan N. Tomiyama w Kraju Kwitnącej Wiśni” 残念ながらポーランド語が判らない辞書(ポー英)を買って引いてみたが、どの単語も載っていない。語尾がちょっと違う単語ばかりだ。察するところ桜咲く国日本の意味らしい。後日、ポ文協ポーランド語講習会のお陰で、やっと記事を読むことが出来るようになった。

先日久しぶりで、『ワルシャワの七年(工藤幸夫著)』拾い読みしていたところ…ポーランド人はいまも昔も、日本に親しみと好意を持っていることを、日本人は知らない。彼らが「桜咲く国」あるいは「日出ずる国」と好んで日本の美弥の文字を書き連ねていることに気づいていない。…とあった。そうか！こんなに深い意味のある表現だったのか！

35年後、はじめて理解できたこのポーランド語 Kraj Kwitnącej Wiśni!

…私とポーランド。ゴムウカ時代のポーランド、連帯運動下のポーランド、新時代のポーランド。そしてあのひと、この人、想いは廻る。追憶と期待は薄れることなく、ますます膨らんでくる。

# ポーランド美術散歩 (3)

國田 祐 作

## バロックから新古典へ

何年か前にワルシャワを訪れたとき、国立美術館で「東と西の出合い」というテーマで展覧会が開かれていました。特に目をひいたのは十七世紀の王侯貴族の肖像画が東洋的スタイルであったことです。頭を剃りあげ口ひげを垂らし、どう見てもトルコ武人の姿と変わるところがありません(図1)。これは「サルマチア肖像画」といわれ、当時の貴族の間で流行していたスタイルです。サルマチアというのは古代ローマ史に



(図1) ヤン・カジミェシ国王

名を留めるイラン系の勇猛な騎馬民族で、ポーランド貴族はこのサルマチア人の子孫であり、特別な人間であるという、いわば神がかり的な考えが貴族を支配していたのです。このような東洋的趣味の一方で、西ヨーロッパ宮廷のファッションを取り入れた婦人像が並んでいて、まさに東と西の出合いを感じさせるものでした。

この時期、宗教改革派に対するカトリック勢力が勝利を収めて、豪華に装飾されたカトリック教会がポーランド各地に建てられました。それはバロック教会と呼ばれています。多くのイタリア人建築家が招かれ、内部装飾や祭壇画に腕をふるいました。これらのバロック教会の豪華な様式は貴族の宮殿にもとり入れられました。ワルシャワの王宮

もこの時期にバロック様式に改装されています。

十八世紀後半になるとワルシャワを中心として新しい美術の流れが起ります。その先頭を切ったのがスタニスワフ・ポニアトフスキ国王でした。彼はのちにロシア女帝エカテリーナに強制的に退位させられたポーランド最後の国王ですが、若いときから洗練された趣味を持ち、王位につくとすぐフランスやイタリアから多くの建築家や画家を招き、王宮や離宮を新しいスタイルですっきり変えました。バロック建築の過剰な装飾を取りはらい、古代ギリシャ神殿を思わせる典雅なファサード(正面)を採用し、スッキリした直線的な要素でまとめました。これは当時の西ヨーロッパで流行した新古典主義建築にならったものです。ワルシャワのワジェンキ公園にある水上離宮(イタリア人メルリーニ設計)はその代表的な例です(図2)。この公園で日曜日ごとにシヨパン・コンサートが開かれるのは有名です。

新古典主義はたちまち広まり貴族の宮殿をはじめワルシャワの富裕な商人たちの邸宅に採用されました。イタリアから招かれ宮廷画家となったカナレットは王宮を中心にこ



(図2) 水上離宮  
(ワルシャワ、ワジェンキ公園)

れらの建築が立ち並ぶ新しい都市景観を精密に描いた作品をたくさん残しました。第二次大戦中、ナチスドイツによってワルシャワの中心部は徹底的に破壊され、これらの建物のほとんどが消滅しましたが、戦後再びそのままの姿で復興されました。このとき、カナレットの精密な都市風景画が復元事業に大きな役割を果たしたのです。

# 一八四〇年のシヨパンと時代精神 (3)

三浦洋

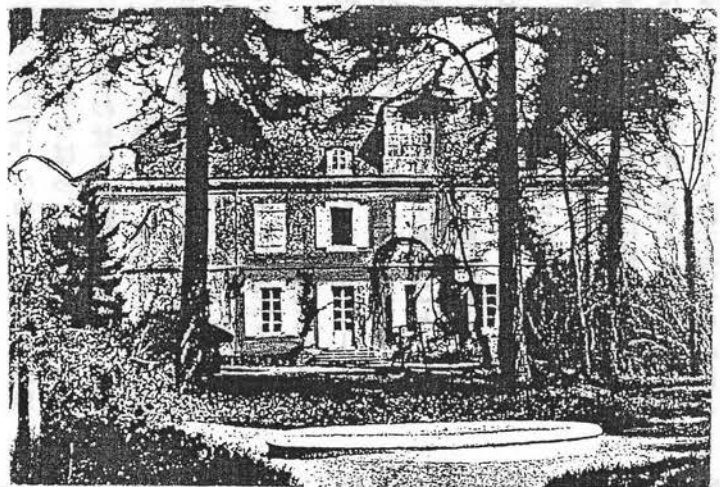
## 一八四〇年とは何だったか

さて、①トルコ語と②「五月三日」の疑問は既に解けましたが、③なぜ一八四〇年にはノアンに行かなかったか、が残っています。シヨパンとサンドにとって、一八四〇年とは何だったのでしょうか。

先に、「五月三日憲法」運動の意見広告が「両世界評論」誌に掲載されたことを書きましたが、実は、サンドは「両世界評論」誌の契約ライターでした。ですから、チャルトリスキが「両世界評論」誌でキャンペーンを展開するにあたって、サンドの仲介があったことは容易に想像できます。また、この年は、シヨパンとサンドがそろって参加する行事が続きました。四月には、シヨパンの弟子ポーリーヌ・ガルシアが、サンドの仲介でルイ・ヴィアルドーと結婚しました。また、七月には、七月革命十周年記念パレードでベルリオーズ作曲の「葬送交響曲」が演奏されましたが、そのリハーサルに

シヨパンとサンドが招かれました。年末にはミツキエヴィチの講義が始まることになっていたわけですから、この年は、ノアンに行かず、パリでずっと過ごすというのが、二人の選択だったのでしょうか。

従来、一八四〇年にノアンに行かなかったのは、サンドの戯曲「コジマ」の上演が不評で赤字を出し（サンドの親友、マリー・ドルヴァルが主演したが七回で打ち切られた）、その後始末のためであったと言われてきました。しかし、それ以外の理由として、チャルトリスキやミツキエヴィチへの協力があったのでしよう。シヨパンが「五月三日だ！」と書いた一八四〇年は、ポランダの独立運動の一つの転機でした。そこには、サンドの大きな協力があったのです。後に、画家クフイヤトコフスキが描いたランベール館のパーティの絵に、チャルトリスキ一族とシヨパン、ミツキエヴィチだけではなく、サンドも描かれているの



ノアンのサンド邸

ンと行動を共にしたり、あのカール・マルクスと文通したりしました。プランの著書「労働の組織」(一八三九年刊)に呼応するよう、職人の労働組合をテーマとしたサンドの小説「フランス遍歴の職人」が一八四〇年十二月に出版されたことは、実に象徴的です。サンドたちが主役となる二月革命(一八四八年)への密かな準備が始まったのです。

また、シヨパンの方は、一八四一年に親友フォンタナがアメリカへ行ってしまっただけで、楽譜商に自分で作品を売らなければならなくなりました。そのときシヨパンはお金を中心に動いて近代社会の現実に出会って激しくいらだちます。後期の作品の特徴は、そうした彼の苦悶を映し出しているのかもしれない。近代とは、株と同じように芸術がお金で売買される時代です。そういう社会の成りゆきに対して、芸術家としての良心から生まれる悔しさ(ポランダ語の「ジャル」)や淋

は至極もつともなことでしよう。

また、一八四〇年前後のフランスは、ギゾー内閣の成立によって七月王政が一段と保守化し、拜金主義の風潮が強まりました。当時のフランス王ルイ・フィリップは「株屋の王」とあだ名されるほど、「バブル経済」の創始者でした。だからこそ、それに反対する社会主義思想が台頭し、サンドは社会主義者ルイ・ブラ



しさを、シヨパンはフォンタナへの手紙で吐露しています。

「今日、ファンタジーが完成した——空は晴れているが、私の心は淋しい」(一八四一年十月二十日)。ですから、かつてシューマンがドイツ語で「我々の時代精神」とシヨパンを呼び、新しくはジャンケレヴィチがフランス語で「最初の近代人」と表現したシヨパン像は、一八四〇年代の彼にこそ最もふさわしいと言えます。

一八四一年、二年にシヨパンは、生涯の頂点に位置する二つのコンサートを成功させます。ミツキエヴィチはリストたちとともに、一番前の席で耳を傾けました。当時の様々なコンサート評を読むと、「ミツキエヴィチが優れたポーランドの詩人であるように、同郷のシヨパンはピアノの詩人である」という言い方が見られます。同じ時期に、同じパリでミツキエヴィチが講義をしていたからこそ、こういう賞賛が生まれたわけです。今世紀になって、モスクワ音楽院の教授ゲンリッヒ・ネイガウスは、そのシヨパン論に「ピアノの詩人」という題をつけましたが、その遠い起源が一八四〇年代にあるわけです。

## ドラクロワの貢献

一八四〇年のシヨパンと時代精神について、既に私の答は書き尽くしましたが、もう一人、是非とも紹介しておきたい人物がいます。それは、シヨパンとサンドのかけがえのない友人であった画家のウジェーヌ・ドラクロワです。今年は、「日本におけるフランス年」であるために、ドラクロワ展が九月十一月に開かれました。来年二、三月には、彼の名画「民衆を率いる自由の女神」が来るそうですから、この機会に彼のことを知っておきましょう。

ドラクロワは、シヨパンとサンドの関係を交際の最初から知っていた人で、彼らの肖像画を描いたことで有名ですが、亡命ポーランド人たちに貢献した人でもあります。実は、チャルトリスキがランベール館



(ドラクロワ)

を獲得する際に仲介したのがドラクロワです。なぜドラクロワが、こんなにもポーランド人を支援し続けたのかはよくわかりませんが、シヨパンを誰よりも崇拜していたのは事実です。また、ドラクロワの本当の父が、かつてのフランス外務大臣タレイランであるという考証を信じるならば、関心は一層増します。なぜなら、タレイランは、ナポレオンの片腕としてポーランドを任された人であり、ナポレオン失脚後はロンドンでチャルトリスキにアドライスをしたこともあるからです。(ウィーン会議では互いに敵であったにもかかわらず)。さらにシヨパンの父がフランス語を教えたマリア・ヴァレフスカをナポレオンに引き会わせられたのもタレイランです。タレイラン自身もポーランド人女性(ユゼフ・ポニャトフスキの姉、テイシユキエヴィチ夫人)を愛人にしていました。が、彼は一八三八年になくなりました。

実は、サンドがドラクロワと初めて会ったのは、シヨパンと知り合う前でした。一八三四年秋、「両世界評論」誌に執筆者の似顔絵を書く仕事をドラクロワが引き受けたので、サンドと出会ったので。サンド、シヨパン・ドラクロワ

がそろって顔を合わせたのは、一八三八年春頃(マジヨルカ島へ行く前)だったと推測されますが、一八四〇年には三人の親密さが増し、サンドの息子モーリス(かつての夫との間の子供)が二月にドラクロワに弟子入りして絵を習い始めます。シヨパン、サンド、ミツキエヴィチ、ドラクロワがパリやノアンで楽しく語り合うようになったのは当然の成り行きでしたし、後にシヨパンの葬儀の準備や墓の記念碑づくりを進めたのもドラクロワでした。シヨパンの死後も、永らくドラクロワは亡命ポーランド人たちと交際を続け、シヨパンの思い出を語り合ったとしばしば日記に書いています。

さらに驚くことは、ドラクロワがチャルトリスキに斡旋したランベール館は、その昔(一七二九〜五一年)サンドの曾祖父クロード・デュパンの持ち物だったのです。当時ランベール館にはヴォルテールらフランスの啓蒙思想家が招かれたそうですが、ヴォルテールの本はシヨパンの愛読書でしたから、なおさら因縁を感じます。

いや、サンドにはもっと重要な事実があります。サンドはポーランド国王アウグスト二世(ザクセン選帝候で人種的にはドイツ人)の血を十

六分の一引いています。十八世紀前半にフランス元帥になったモーリス・ド・サックスはアウグスト二世の婚外子で、この人がサンドの一方の曾祖父です。サンドは先祖を誇りにしており、息子の名前「モーリス」は、この曾祖父にあやかったと言われます。（サンドの父の名もモーリスだった）。

### 心はポーランド人

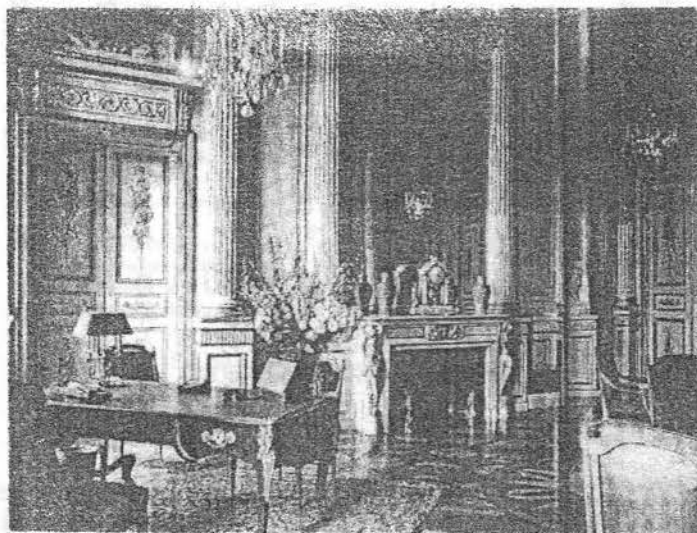
サンドとドラクロワが、どんなにポーランドに関わっていたかが、おわかり頂けたと思います。

「生まれにおいてはワルシャワ人、心においてはポーランド人、だが、才能においては世界市民であった」と、かつてポーランドの詩人ツイプリアン・カミル・ノルヴィットはシヨパンを追悼しました（一九九二年発行「ポレ」第18号の拙稿を参照されたい）。それをまねすれば、ジョルジュ・サンドは「生まれにおいてはフランス人だが、心においてはポーランド人であった」と言えるでしょう。シヨパンがサンドと暮らすようになった本当の理由は「サンドが「心においてはポーランド人」だったからだ、と私は考えています。ドラクロワもまた、シヨパンたちとのつきあいを経て、「心にお

いてはポーランド人」になりきっていたのかもしれない。

私たちの「北海道ポーランド文化協会」になぞらえて言えば、シヨパンを取り巻くサークルは、サンドを会長とする「パリ・ポーランド文化協会」だったわけです。ドラクロワは、その最も熱心な会員だったといふことになります。またサンドの友人で、後にポーランド系のハンスカ夫人と結婚した作家バルザックも会員に含めてよいでしょう。彼は、ノアン

のサンドとシヨパンを訪れる客でした。バルザックの小説「ゴリオ爺さん」のラストシーンはパリのヴァンドーム広場ですが、まるで約束したかのようシヨパンはヴァンドーム広場に引越し、そこで亡くなりました。さらには、二十世紀フランスの作家、アンドレ・ジイドも含めてよいかもしれません。ジイドは「にせ金作り」という小説で、ポーランド人のピアニストと駆け落ちするフランス人男性を描いています。ジイドには「シヨパンに関する随想」というエッセイもあります。



シヨパンの最後の住居となったヴァンドーム広場のアパートマン

このように見てくると、シヨパン、サンド、ドラクロワは、バ

リで偶然に出会って親しくなったように見えますが、彼らの先祖たちの時代から、ポーランドと切っても切れない関係をもっていたことがわかります。それぞれの分野で十九世紀ロマン派を代表する音楽家と作家と画家の出会いですが、実は、彼らを結んでいた本当の絆は、ただ一つ、「ポーランド」だったのです。

(終)

10月17日の第33回例会は三浦洋さんによる「シヨパンについて」と題してのお話の最終回でした。三回に分けてのお話は一般には知られていないシヨパンの別の面を紹介していただいたという意味で大変有意義かつ興味深いもので、参加者にも大好評でした。POLEの連載も今回で終了しました。本当にありがとうございました。





# 1997/98年度

一九九八・九九年度

## 総会・懇親会行われる



ました。  
なお、総会に提  
出された議案の内  
容は以下の通りで  
す。

本年度の総会が十月十七日  
(土)午後六時半より、すみれホ  
テルで行われました。総会では、  
ご都合が悪く欠席の谷本一之会長  
よりメッセージによるご挨拶があ  
りました。

総会は、安藤 厚氏の司会で以  
下のような順序で行われました。

(一) 一九九七・九八年度事業

および決算報告、監査報告

(二) 一九九八・九九年度事業計

画と予算

(三) 会則の改訂について

(四) 新年度役員承認

(五) その他

このあと懇親会に入り、まず本  
間富雄氏による開会の挨拶と乾杯  
があり、ついで会食の途中で、  
ポーランド語によるポーランド民  
謡の合唱などの飛び入りもあり、  
にぎやかなパーティーとなりました。  
最後に、副会長の遠藤道子氏  
の挨拶と乾杯で懇親会の幕を閉じ

### 前年度の主催事業

《例会》

▼第三十二回例会「ポーランド料理  
を楽しむ会」、七月四日(土)、札  
幌市女性センター料理実習室(参加  
者二十七名)

▼第三十三回例会 ビデオによる映  
画鑑賞会「ふたりのベロニカ」、九  
月二十七日(日) 札幌市女性セン  
ター(参加者十三名)

▼クラコフ日本美術工芸センター支  
援バザー、六月六日、七月四日、九  
月二十七日(合計十万八千円)

《ポーランド語講習会》  
第二十七期 一九九八年五月十三  
日(水)より一〇週間(参加者 八  
名)

《その他》

▼ポーレ発行 第三十八号(十一月  
一日)第三十九号(四月十八日)第  
四〇号(九月一〇日)計三回

▼総会 一九九七年十一月二十八日  
(すみれホテル)

### 《1997/98年度決算》

【収入の部】	予算	決算	内訳	単位：円
会費	540,000	397,530	会費全額の87%、郵便振替払出料差引後	
その他	15,000	29,370	入会金、ポ訪問団寄附、銀行利子	
小計	555,000	426,900		
繰越金	778,509	778,509		
合計	1,333,509	1,205,409		
【支出の部】				
事業費	310,000	174,043	例会3回、総会補助:31,230、ポ語補助:49,855、料理補助:34,046	
連絡費	80,000	98,490	ポーレ発送、はがき他	
編集費	100,000	25,734	ポーレ制作費、原稿料他	
会合費	60,000	56,020	運営委員会他	
事務費	180,000	188,150	人件費、事務用品、封筒印刷	
予備費	603,509	35,599	日の丸・ポーランド国旗、カセットテープ	
小計	1,333,509	578,036		
繰越金	0	627,373	銀行預金470,317 郵便局27,100 現金129,956	
合計	1,333,509	1,205,409		

タル」(主催西野コン  
サート)

▼六月十八日(木)

「シヨパン・そのポー  
ランドの心」遠藤郁子  
とマリア・ポミヤノフ  
スカ

(主催 日本シヨパン  
協会北海道支部)

### 本年度の事業計画

《主催事業》

後援会、音楽会、映  
画会など三回程度行う

日本・ポーランド国  
交樹立八十周年・シヨ  
パン没後百五十周年に  
関係するポーランドの  
夕べ(仮題)

《後援事業》

音楽会、展覧会、映  
画会などを適宜行う

《ポーランド語講習会》

初級、中級クラスを年間各一  
リズ程度行う

《その他》

会誌ポーレ発行(年間三回)

総会一九九九年十月ごろ  
運営委員会 三回程度

▼運営委員会二月十四日、三月九  
日、(計二回)

▼吉田勝一さん歓迎パーティー(有  
志)八月二十三日(東急イン)

《後援事業》

▼五月二十一日(木)「カジメツ  
ジュ・ギョルゾード・ピアノリサイ

(1998/99年度予算案)

【収入の部】	前年度決算	予算	内訳	単位：円
会費	397,530	400,000		
その他	29,370	1,000	銀行利子,その他	
小計	426,900	401,000		
繰越金	778,509	627,373		
合計	1,205,409	1,028,373		
【支出の部】				
事業費	174,043	310,000	集会補助:30,000 語学講習会:60,000 例会:100,000 ポーランドの夕べ:120,000	
連絡費	98,490	100,000	ポーレ発送3回, その他	
ポーレ編集費	25,734	30,000	原稿料他	
会合費	56,020	30,000	運営委員会,その他	
事務費	188,150	190,000	人件費:160,000 事務用品	
予備費	35,599	338,373		
小計	578,036	998,373		
繰越金	627,373	30,000		
合計	1,205,409	1,028,373		

会則の改訂について  
第十二条として以下の条項を追加し、第十二条および第十三条をそれぞれ第十三条および第十四条とする。「第十二条 本会に名誉会員をおくことができる。名誉会員は運営委員会において推挙され、総会において承認される。名誉会員は会費を免除される。」

本年度役員

(2年任期のため前年度から引き続き)

会長 谷本一之  
副会長 遠藤道子  
運営委員

安藤 厚・市川 恒樹  
薄井 豊美・國田 祐作  
小林 暁子・斎田 道子  
佐久間 隆・佐々木保子  
霜田千代麿・高岡 美保  
中島 洋・灰谷 慶三  
本間 富雄・安田 誠子  
吉野 悦雄・渡辺 卓

ポーレ編集委員

安藤 厚・  
\*小笠原 正明  
國田 祐作  
\*佐々木 保子  
\*斎田 道子  
霜田千代麿  
\*安田 誠子  
吉野 悦雄  
(\*印は世話人)

監査委員

富山 信夫  
吉田 宏  
事務局長 小笠原 正明

会費納入のお願い

ポ文協の活動は、あなたの会費で  
支えられています!

北海道ポーランド文化協会の会計年度は 10月から翌年の9月までです。1998-99年度の会費の納入をお願いします。本誌と同封で振替用紙をお送りします。

〈銀行振込み先〉

北洋銀行大通支店 普通預金  
(店番) 301 (口座番号) 0605-084  
北海道ポーランド文化協会事務局長  
小笠原 正明

〈郵便振替え先〉

02740-5-19735 北海道ポーランド文化協会

〈会費について〉

会費の値上げはいたしません。  
ただし、維持会員の制度がありますので切り替えを募集します。

(一口5,000円から)

連絡は事務局長 小笠原まで (☎386-3405)



「ポーレ」編集委員会  
小笠原正明・斎田道子  
佐々木保子・安田誠子  
(連絡先) 621・1738  
(斎田)

POLE 第 41 号(1998.12.10)目次

伊東孝之「やさしいポーランド史(1)」	1
〈第 35 回例会〉「ポーランドにおける日本文学の現状について」(講演:ミコワイ・メラノヴィチ、1999.1.16)の お知らせ	2
栗原朋友子「クラクフからカシューブまで～わたくしのポーランド熱」	3
富山信夫「桜咲く国」	4
國田祐作「ポーランド美術散歩(3)バロックから新古典へ」	5
三浦洋「1840 年のショバンと時代精神(3)」	6
1998～99 年度総会・懇親会(1998.10.17)報告	9